九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本におけるレズビアン，　ゲイ，　バイセクシュアル当事者の　セクシュアルアイデンティティに関する心理学研究の課題　：　海外研究との比較による検討

田中，将司
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/2202956

出版情報：九州大学総合臨床心理研究．9，pp.205-216，2018-03-22．九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
Vol. 9, pp. 205－216.

日本におけるレズビアン，ゲイ，バイセクシュアル当事者のセクシュアルアイデンティティに関する心理学研究の課題
—海外研究との比較による検討—

田中将司　九州大学大学院人間環境学府

要約

日本におけるレズビアン，ゲイ，バイセクシュアル当事者（LGB当事者）のセクシュアルアイデンティティ（LGBアイデンティティ）の心理学研究について，海外文献と比較することによって，研究の課題や今後の発展の可能性を見出そうと試みた。その結果，本邦においてはLGBアイデンティティ形成プロセスに関する研究はいくつか見られるが，LGBアイデンティティを測定する研究はほとんど見られないことが明らかになった。今後LGBアイデンティティを測定する研究の蓄積が求められるが，海外文献において，社会的背景によってLGB当事者の自身のセクシュアリティに抱く感情や信念が異なる可能性が指摘されている。本邦においては，法的に同性愛者や同性愛行為が禁止されていなかったこと，戸籍という他者も含めた独自の身分登録制度が用いられていること等の社会学的知見から，特にMohr & Kendra（2011）における「アイデンティティの優位」,「他者受容の問題」の次元や測定項目は心理学的に再検討されるべきであるだろう。
キーワード：セクシュアルマイノリティ，セクシュアルアイデンティティ，性的指向，プロセス，測定

Ⅰ．はじめに

近年，性的指向に関するマイノリティの存在が取り上げられるようになった。セクシュアリティは，いくつかの要素によって構成，判断されるものとされており，性的指向は，「性的魅力を感じる対象の性別が何か（針間，2014）」という要素にあたる。ジェンダー・アイデンティティが男性の場合は女性に，女性の場合は男性に性的魅力を感じるとする者をマジョリティとしたとき，その他のセクシュアリティに性的指向が向く場合にはマイノリティとして区分されうる。特に，ジェンダー・アイデンティティと同じセクシュアリティに向く者を男性の場合をゲイ，女性の場合をレズビアン，両性に向く者をバイセクシュアルと呼び，セクシュアル・マイノリティと同義に用いられることの多いLGBTの概念の頭文字に用いられるほど，代表的な性的指向に関するマイノリティとして知られている。その存在が取り上げられている理由の一つには，地方自治体レベルでのパートナーシップ制度の導入が挙げられる。平成29年２月現在，６つ以上の地方自治体において，同性同士，もしくは，異性同士に限らないパートナーシップを公的に認める制度を導入しており（永田，2016；関根，2017），これまで無視されてきた同性愛者，両性愛者の人権の一部が保障されるようになったことは大きな話題になった。

一方で，レズビアン，ゲイ，バイセクシュアル当事者（以下，LGB当事者）を取り巻く課題も依然として多い。同性愛者であった男子大学院生の自殺事例はその一つである（朝日新聞，2016）。アウティングの問題，大学の対応に関する問題等，LGB当事者に関する周囲の理解不足という課題が，このことによって浮き彫りとなった。特に，相談室来談に至ったにも関わらず自殺に至ったことから，心理学領域における当事者理解の課題は大きいように思われる。ゲイ・バイセクシュアル男性において，いじめ被害を受けた者，自殺を考えた，自殺未遂を行った者の割合が高いことや（日高・

木村・市川，2007），レズビアン・バイセクシュアル女性のうつ病罹患経験の割合が異性愛女性と比較して高いこと（Kaung，2005）からも課題の大きさを指摘できるだろう。本邦においては心理学領域で行われてきた研究が調査と実践のいずれにおいても少ない（石丸，2008a）ため，研究の蓄積が必要な領域であるといえる。

その中でも，LGB当事者のセクシュアルアイデンティティ（以下，LGBアイデンティティ）に関する心理学研究は，蓄積されるに値する領域の一つである。アイデンティティの確立は，特に青年期の課題として取り上げられているが（Erikson，1959/1973），LGBアイデンティティは特に，差別や人権問題を受けていることや，民族等のマイノリティと異なり，セクシュアリティというプライベートな領域であるため，家族，近親者からの支援を得づらいこと（石丸，2001），ロールモデルの不在（平田，2014）といった理由から，ポジティヴに認識することが難しい可能性がある。

海外研究においても示されているように，LGBアイデンティティの研究はその心理的影響との関連からみても意義があるといえる。例えば，LGBアイデンティティをどのように認識しているかは，自尊心（Walters & Simoni，1993；Mohr & Fassinger，2000）や，不安，抑うつ傾向（Rosario，Hunter. Maguen，Gwadz & Smith，2001）と関連をもつことが示されている。

本邦においてLGBアイデンティティについて言及する研究は少なく，心理的影響との関連を調べるに至るには十分な研究が行われていない状況にあるといえる。そのためまず，本邦のLGB当事者がどのようなセクシュアルアイデンティティを持ちうるかについて，焦点を当てていく必要があるだろう。

具体的な研究の課題や今後の展開については，上述のような研究の数が多い海外研究をレビューし本邦の研究と比較することで見出すことができると考えている。よって本論の目的は，LGBアイデンティティに関する心理学的研究をレビューし，海外研究と日本での研究を比較することで，本邦におけるLGBアイデンティティ研究の課題や今後の展開の可能性を見いだすこと，とする。

Ⅱ．LGBアイデンティティについて

先行研究のレビューを行う前に，LGBアイデンティティの定義について整理する。LGBアイデンティティ研究は，自認したセクシュアリティに対して，どのような思いを持っているかも含めて行われることが多い（Cass，1979；Cass，1996；Mohr & Fassinger，2000； Mohr & Kendra，2011）。LGBアイデンティティ研究において，「レズビアン，ゲイ個人が自身の性的指向の認識と受容を達成していく一連の様相（Mohr & Fassinger，2000）」に関する研究（以下，LGBアイデンティティ形成プロセスに関する研究）は，最も着目されてきた研究の一つであり，詳細は後述するが，Mohr & Fassinger（2000）はこれらの研究に「自分の性的指向，他のレズビアン，ゲイの当事者，異なる性的指向の人々に関する，個人の感情や信念を含む多次元構造として概念化されている」と指摘した。つまり，LGBアイデンティティとして行われてきた研究では，単にLGB当事者であるという認識をもち，アイデンティティとして確立することだけでなく，その認識に伴う感情や信念まで扱われていたということになる。本論は，日本でLGBアイデンティティをどのように持ちうる可能性があり，それがどのような心理的影響をもたらすかを見出すことを最終的な目標としている。そのため，性的指向の認識とそれに伴う感情や信念の両方ともレビューすることには意義があるだろう。よって，先行研究を踏まえ，LGBアイデンティティをレズビアン，ゲイ，バイセクシュアルであるという認識と，認識に伴う個人の感情や信念，と定義する。

また，LGBアイデンティティ研究は，それぞれのセクシュアリティによって研究が行われてい

ることもあるが，レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルのセクシュアルアイデンティティを分けずに考えることも近年多い（Rosario, Schrimshaw & Hunter, 2008；Mohr & Kendra, 2011；Chilo & Savaya, 2011；Bregman et al., 2013）。その理由にMohr & Kendra（2011）は，3点挙げている。1点目に性的指向に関して社会的差別を受けてきたという重大な歴史的背景がどの当事者にも共通しているということである。2点目に，LGBという用語が公的に用いられるようになってきたため，各々の研究より広くLGBでの研究を行った方が，政策等の社会的要請に応えられる可能性があることを挙げている。3点目には，セクシュアリティは複雑さや流動性をもっており，レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルといったラベリングも当事者によって変化する可能性があるため，対象者を広く設定した方が，当事者の経験を捉えやすいことを述べている。以上のことから，本論においてもセクシュアリティを限定せずにその研究を行うことにも十分な意義があると考え，LGB当事者のセクシュアリティを分けずにレビューを行っていく。

Ⅲ．海外におけるLGBアイデンティティに関する心理学研究

海外におけるLGBアイデンティティに関する研究は，主にLGBアイデンティティの形成プロセスに関する研究，測定に関する研究の2つに分けることができる。以下，まずLGBアイデンティティの形成プロセスに関する研究を先に取り上げ，のちに多次元性に関する研究を記述する。

1．LGBアイデンティティ形成プロセスに関する研究

LGBアイデンティティの研究として多く注目されてきたのは，LGB当事者がどのように自身のセクシュアリティを認識し受け入れていくかというLGBアイデンティティの形成プロセスに関する研究（表1）である。代表的なものとしてLGBアイデンティティ形成過程モデルを示す研究があり，Cass（1979）やTroiden（1989）のものがそれに当たる。現在でも臨床現場に有用な知見として引用されており（葛西，2014），LGBアイデンティティの形成プロセスにはいくつかの段階があると考え，それぞれの段階における違いを示している。

表1　Cass（1979），Troiden（1989）のLGBアイデンティティ形成プロセスのモデルと，モデルに当てはまらない例

<table>
<tr><th>Cass（1979）のモデル</th><th>Troiden（1989）のモデル</th><th>モデルに当てはまらない
海外での例</th><th>モデルに当てはまらない
日本での例</th></tr>
<tr><td></td><td>段階1：鋭敏化</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>段階1：アイデンティティの混乱</td><td rowspan="2">段階2：アイデンティティの混乱</td><td></td><td>混乱なく生活している当事者（眞野，2014）</td></tr>
<tr><td>段階2：アイデンティティの比較</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>段階3：アイデンティティの寛容</td><td rowspan="2">段階3：アイデンティティの受容</td><td rowspan="3">Troiden（1989）の段階3でとるとされる同性との性行動より段階4でとるとされる家族へのカミングアウトを先に行う当事者（Floyd & Stein, 2002）</td><td></td></tr>
<tr><td>段階4：アイデンティティの受容</td><td></td></tr>
<tr><td>段階5：アイデンティティの誇り</td><td rowspan="2">段階4：コミットメント</td><td>誇りに関連する語りが見られない当事者（横木，2003）</td></tr>
<tr><td>段階6：アイデンティティの統合</td><td>統合していると捉えていたが1年後同じようにセクシュアリティをポジティヴに捉えられない当事者（Rosario et al., 2008）</td><td></td></tr>
</table>

例えば，Cass（1979）は同性愛者のセクシュアルアイデンティティに着目しその発達過程を６段階に分けて示した。それぞれを，「段階１：アイデンティティの混乱（自分自身やその自分の振る舞いに同性愛的傾向があることを認識し，今まで築いてきた異性愛者である自己像との差に混乱する段階）」,「段階２:アイデンティティの比較(ヘテロセクシュアルと自分の振る舞いを比較することで，異性愛者である自己像から離れ同性愛者である可能性を受け入れようになっていく段階)」,「段階３：アイデンティティの寛容（孤独感，疎外感を感じる一方で自己像が同性愛に近づき，他の同性愛者に接触し始める段階）」,「段階４：アイデンティティの受容（継続的な他の同性愛者との出会いによって，同性愛者である自己像を受け入れる段階）」,「段階５：アイデンティティへの誇り（社会的差別，異性愛者の圧力と対抗するために，さらに同性愛コミュニティにコミットし，同性愛者への誇りを強くもつ段階）」,「段階６：アイデンティティの統合（異性愛者の圧力にこだわらなくなり，同性愛者であるアイデンティティを，自分自身の一側面として統合する段階）」としている。

Troiden（1989）は，Cass（1979）の影響を受けつつ４つの段階モデルを提示し，段階ごとにゲイ，レズビアンがとる振る舞いについても述べている。段階1は「鋭敏化」であり，同性への性的魅力に初めて気づく段階とされる。この段階では，異性愛者として振る舞うも，同性愛に関連する出来事に敏感になることが示されている。段階２は「アイデンティティの混乱」であり，Cass（1979）のものに近い。異性愛，同性愛の両方の性幻想，性行動をとりうるとされている。段階３は「アイデンティティの仮決定」とし，Cass（1979）の段階４に近い。この段階では，他のLGB当事者との接触や限られた場へのセクシュアリティの開示が行動として考えられている。段階４は「コミットメント」とされ，Cass（1979）の段階５，６に近い。この段階では，同性との恋愛関係や，ヘテロセクシュアリティの者への広い範囲でのセクシュアリティの開示が挙げられる。このように，段階ごとのLGB当事者の振る舞いまで考えられていた。

しかし，そのような単線モデルの研究には，批判的言及も見られている。Cass（1996）自身，文化的背景が考慮されていないことを指摘し，実際には別のモデルも考えられることを述べているが，例えば，Rosario et al.（2008）は，プロセスに多様性がある可能性を指摘し，自身のセクシュアリティをポジティヴに思えていること，他の人がセクシュアリティについて知っていても快適に思えること等をアイデンティティの統合とした上で，その統合のレベルの１年間の変化を検討している。変化しない者，統合のレベルが上がっている者もいるが，下がっている者もいることを示し，このことから，常に段階を上がっていくとは限らない，LGBアイデンティティ形成プロセスの多様さを主張している。

Floyd ＆ Stein（2002）は，行動からプロセスの多様性を示している。Troiden（1989）の述べたような振る舞いがどの年齢で起きたかという調査を行った結果，性的接触やセクシュアリティの開示の経験が，次の段階でおきうる経験よりも後の年齢で起きたLGB当事者が一定数いることが示された。このようなことからもLGBアイデンティティの形成プロセスにはいくつかのパターンがあることが考えられた。

ここまで，海外におけるLGBアイデンティティのプロセスに関する心理学研究について述べてきた。単線モデルの研究は，LGB当事者の理解に有用であったが，プロセスは多様である可能性があり，単線モデルのみでは，LGB当事者全員のLGBアイデンティティを理解することは難しいことが指摘できよう。

２．LGBアイデンティティの測定に関する研究

LGBアイデンティティの形成プロセスが注目

を浴び，課題点が見出されるようになった他方，LGB当事者が自身のセクシュアリティをどのように思っているかを測定する研究も近年みられるようになった。後述するが現在はLGBアイデンティティが多次元性をもったものとして捉える研究がみられるようになっている。例えばCass（1979）の研究からでも，LGBアイデンティティに誇りを持つことと受容をすることは質的に異なるように考えられ，そこから多次元性への着想に至ることもできうるが，その他にも，LGBアイデンティティの多次元性という考え方にたどり着くまでに重要であった研究があり，一つに内在化された同性愛嫌悪に関する研究が挙げられる。そのためまず，内在化された同性愛嫌悪に関する代表的な研究をレビューし，後に多次元性をもとにした研究を記述する。

内在化された同性愛嫌悪（Internalized Homophobia）とは，LGB当事者自身が持ち合わせている同性愛に対する嫌悪感のことをさし，一部の内容は，LGB当事者の自分の性的魅力に関する信念や感情に値する。同性愛嫌悪における嫌悪（Phobia）という言葉には，その言葉が一般に示す病的な恐怖だけでなく，偏見等によるネガティヴな態度も意味として含まれていることから，ホモネガティヴィティ（Homonegativity）という言葉を用いることもある（Herek, 1984）。具体的にはShidlo（1994）に詳しい。Shidlo（1994）は内在化された同性愛嫌悪を，「他者の同性愛行為や，自分自身の同性愛特徴に対するネガティヴな態度や感情」と定義し，これまでの内在化された同性愛嫌悪の測定の研究をレビューした上で新たな尺度作成を行い，内在化された同性愛嫌悪がどのようなものか，その実態を捉えようとした。結果，３因子で構成された尺度が作成され，自分自身の性的指向に関する態度や感情の項目で構成された「個人内ホモネガティヴィティ（Personal Homonegativity）」，社会的に共通した同性愛者に対する態度や，他の同性愛者に対して思うことに関する項目によって構成された「全体的ホモネガティヴィティ（Global Homonegativity）」，他の人にセクシュアリティの開示を行えないといった内容の「開示（Disclosure）」とした。これらは自尊心や抑うつ傾向といった心理的問題との関連を示しており，内在化された同性愛嫌悪の心理学研究の重要性も示している。

一方で，課題点もShidlo（1994）は述べている。特に，「開示」について，単に内在化された同性愛嫌悪を測定しているとは限らず，開示しない方が現実的な利益が多いから，開示しないという選択を行っていたり，個人が所属する社会によって，例えば同性愛に受容的な社会であったならば，開示は内在化された同性愛嫌悪のファクターに含まれなかったりする場合を想定している。よって「開示」についてはさらなる精査が課題として残されていた。

上述のようなプロセス研究，内在化された同性愛嫌悪に関する研究から，多次元性という着想に至った研究に，Mohr & Fassinger（2000）が挙げられる。Mohr & Fassinger（2000）は，プロセス研究に対しては，そもそもLGBアイデンティティとして捉えていたものは，認識だけでなく，信念，感情という多次元で構成されているため，単線モデルで理解できない当事者がいる可能性があることを指摘し，内在化された同性愛嫌悪研究に関しては，LGB当事者が自身のセクシュアリティに対して抱く信念や感情は，内在化された同性愛嫌悪に限らず，別の次元やその次元による心理的影響がある可能性を指摘している。例えばLGB当事者の環境とストレスに関する研究から（Waldo, 1999；Hershberger & D'Augelli 1995）から，LGB当事者であることを他者から認められていると感じる，といった次元もありうることを述べた。つまり，LGBアイデンティティを単線モデルのプロセスで捉えたり，一次元のみで捉えたりすることは，別のモデルの存在や，別次元においてネガティヴな感情や信念をもちうること

表2　Lesbian, Gay and Bisexual Identity Scale（LGBIS）尺度構成
（Mohr & Kendra（2011）をもとに筆者が作成）

因子名	項目数	項目例
隠したい感情 (Concealment Motivation)	3	私の性的指向はとても個人的でプライベートな問題である。
不確かなアイデンティティ (Identity Uncertainly)	4	私は自分の性的指向が何かについて，完全な確信は持っていない。
内在化されたホモネガティヴィティ (Internalized Homonegativity)	3	できることなら異性愛者であることを選んでいただろう。
認める難しさ (Difficult Process)	3	自分がLGBであることを認めることはとても辛いプロセスだ。
他者受容の問題 (Acceptance Concerns)	3	私の性的指向は人々にどのような影響を与えるかについてよく考えている。
LGBアイデンティティの優位 (Identity Superiority)	3	私はヘテロセクシュアルの人たちを見下している。
LGBアイデンティティの中心性 (Identity Centrality)	4	レズビアン（ゲイ，バイセクシュアル）であることは私の人生のとても重要な側面だ。
LGBアイデンティティの肯定 (Identity Affirmation)	3	レズビアン（ゲイ，バイセクシュアル）であることが嬉しい。

を見落とす可能性があると考え，多次元性のあるLGBアイデンティティという発想のもと，過去の研究をもとに尺度を作成し，妥当性，信頼性の検討を行っている。表2は，Mohr & Fassinger（2000）を改訂したMohr & Kendra（2011）の「Lesbian, Gay and Bisexual Identity Scale（以下，LGBIS）」の尺度の構成をもとに筆者が作成したものである。8因子27項目で構成され，因子はそれぞれ，「隠したい感情（Concealment Motivation）」，「不確かなアイデンティティ（Identity Uncertainly）」，「内在化されたホモネガティヴィティ（Internalized Homonegativity）」，「認める難しさ（Difficult Process）」，「他者受容の問題（Acceptance Concerns）」，「LGBアイデンティティの優位（Identity Superiority）」，「LGBアイデンティティの中心性（Identity Certainly）」，「LGBアイデンティティの肯定（Identity Affirmation）」と命名されている。自分のセクシュアリティに関する認識や信念，感情を扱っているため，ここでの「内在化されたホモネガティヴィティ」はShidlo（1994）の「個人内ホモネガティヴィティ」に近い。このMohr & Fassinger（2000）やMohr & Kendra（2011）の研究は，LGB当事者の経験を多次元によって捉えることが可能になっただけでなったことが特徴であり，LGBアイデンティティを多様にもちうることを示すことができたといえよう。一方で，調査協力者全員大学生であったこと，多くが白人であったこと等偏りのあったことが今後考えていく課題であることをMohr & Kendra（2011）自身が述べている。

Shidlo（1994）の述べていた「開示」の課題について，LGBISとShidlo（1994）の尺度を比較してみてみると，Mohr & Kendra（2011）は「内在化されたホモネガティヴィティ」ではなく，「隠したい気持ち」や「他者受容の問題」としてLGBISの中で扱っており，「開示」に関するLGB当事者の気づきは，内在化された同性愛嫌悪とは異なる次元のものとして捉えていた様に考えられる。さらにMohr & Fassinger（2000）は，「Outness Inventory」という別の目録を作成することによって，様々な視点から「開示」を捉えようとした。すなわち，家族，職場，同性愛者の誰に，どの程度知られているか，知られても良いかに関する目録を作り，開示をLGBアイデンティティとして

ではなく，実際の行動や望みといった観点からも捉えようとしている。これによって，現実的な利益といった面にも着目できるようになったことが示唆される。

ここまで，海外におけるLGBアイデンティティの測定に関する心理学研究のレビューを行ってきた。多次元性という考え方の登場により，よりLGBアイデンティティが多様であることを示せるようになったが，サンプルの偏りがあることは今後の課題である。また本邦で用いるにあたって，別の課題もあるように筆者は考えているため，それはⅢにて詳述する。

Ⅲ．日本におけるLGBアイデンティティに関する心理学研究とその課題

日本におけるLGBアイデンティティに関する心理学研究は，プロセスに焦点が当てられていることが多い。以下，いくつかの文献をレビューする。

単線モデルを提示した数少ない研究の一つに，堀田（1998）がある。堀田（1998）は，相談室に来談した２名の同性愛男子大学生の事例をもとに，一つの同性愛アイデンティティの形成プロセスを示した。「１．混乱期」，「２．混乱から受容へ」，「３．受容期」の3段階に分けており，それぞれに学生相談としてのサポートのあり方を記述している。

そのような，単線モデルに対し，意義を唱える研究もいくつか見られている（表１）。横木（2002）は，ゲイ男性のライフヒストリー研究によって，Cass（1979）の述べる「段階５：アイデンティティの誇り」の段階がない事例がありうる可能性を指摘している。また，眞野（2014）のゲイ男性へのインタビュー調査では，自らが同性への恋愛的感情を持つことに戸惑いがなかった当事者もいることを指摘しており，「段階１：アイデンティティの混乱（Cass, 1979）」に関してもその段階を通過しない可能性がうかがえた。このように海外研究同様，単線モデルでは捉えられないLGB当事者の存在がいる可能性は本邦においても指摘されてきている。

測定に関する研究はほとんど見られないが，発達モデルにとらわれない研究の一つに，小宮（2001）が挙げられる。小宮（2001）は，同性愛の子どもが直面する問題を「自己受容の困難」，「自己開示の困難」，「自己イメージの困難」，「事故回避の困難」の４つにまとめた。これらは捉え方によってはMohr & Kendra（2011）の示した次元と重なる部分があるように考えられる。

以上の本邦における研究と海外研究を比較し，日本におけるLGBアイデンティティ研究の課題を挙げるとするならば，やはり日本での測定の研究はほとんど見られないことが挙げられる。いくつかのLGB当事者への他の研究をみると，Mohr & Kendra（2011）の８次元は本邦におけるLGB当事者の理解にもある程度適用可能な概念であるだろう。それは，枝川・辻河（2010）から「LGBアイデンティティの肯定」，枝川・辻河（2011）から「認める難しさ」，宮腰（2012）から「内在化されたホモネガティヴィティ」，宮腰（2013）から「隠したい感情」，「他者受容の問題」に近い語りや記述が見受けられるためである。しかし，Cass（1996）やShidlo（1994）が述べるように，社会・文化的背景によってこの多次元性は異なる可能性がある。そのため，単純にMohr & Kendra（2011）のLGBISを導入することなく，次元によっては再考される必要性はあるだろう。筆者は特に，「アイデンティティの優位」，「他者受容の問題」に関して再検討される必要があるように考えている。以下，その２つの次元の再検討の必要性について述べる。

１．「アイデンティティの優位」の再検討について

Mohr & Kendra（2011）のLGBISにおいて，４項目で構成される「アイデンティティの優位」という次元についてであるが，本邦におけるLGB当事者にはそれほど持ちうることの少ない

次元であることが示唆される。理由の一つに同性愛を表面的には禁止されてこなかったという社会的背景が挙げられる。特に西欧諸国においては，法律で同性愛者であることや同性との性行為を禁止されていたが，日本は異性愛主義の考え方は潜在しているものの公的に禁止されてきたわけではない（原島，2016）。そのような社会と対抗するために自身の性的指向を誇示する必要性について問われると，潜在する異性愛主義社会との対抗はありえるが，黙っていれば公的に存在を脅かされることがない状況であるために，人によっては必要な感情や信念ではないようにも考えられる。上述のように，横木（2002）の研究で，Cass（1979）の「アイデンティティの誇り」の段階に近い語りが得られかったことは一部このことを支持する結果であったといえよう。

２．「他者受容の問題」の再検討について

一方，Mohr & Kendra（2011）の述べる「他者受容の問題」は本邦においては重要な次元であり，新たに別次元の存在も認められるのではないか。理由として，特に日本の家族などの集団，他者との在り方に対する意識の強さが考えられる。例えば明治から続く戸籍制度があるが，個人で行われない身分登録制度は日本独自のものであり（二宮，2008），家を継承していったり，嫁いでいったりとする「家」意識の強さが現存していることを示している（堀江，2010）。家族の在り方に固定概念的意識が潜む本邦において，家族受容の問題はMohr & Kendra（2011）の述べる「他者受容の問題」だけでLGBアイデンティティを説明するのに十分かは定かではない。例えば，異性と性行為を行えないLGB当事者がこれまで引き継いできた家を継げないときに“レズビアン（ゲイ，バイセクシュアル）であることによって他者を裏切っている，つながりを切ることになる”等の感情や信念をもつこともあり得るのではないかと考えている。実際に家に関する語り（石丸，2008b；眞野，2014）は一人に限らず見られ，家族に限らず結婚の話は職場にもある（宮腰，2013）。しかし，その時に自分がLGB当事者であることをどのように認識していたかという記述はほとんどみられないため，「他者受容の問題」に関しては，詳細に検討していく必要があるだろう。

Ⅳ．まとめ

以上，海外，日本におけるLGBアイデンティティ心理学研究のレビュー，その比較によって，日本における研究の課題を述べてきた。日本における研究においては特にLGBアイデンティティの測定に関する研究が少ないため，尺度作成を行っていく必要がある。また，心理学研究の少なさ故，社会学的知見からではあるが，同性愛の法的禁止の不在や戸籍制度といった社会的背景から，日本のLGBアイデンティティの多次元性が海外研究とは異なる可能性があることも示唆された。そのため，Mohr & Kendra（2011）のLGBISをそのまま適用するのではなく，特に「アイデンティティの優位」や「他者受容の問題」といった次元に関しては日本で社会学的観点に加えて，心理学的観点から再検討が行われていく必要性があると考えている。

謝辞

本稿を作成するにあたり，ご指導・ご助言をいただきました九州大学大学院人間環境学府の金子周平准教授に深く御礼申し上げます。

文献

朝日新聞（2016）.「同性愛漏らされ」院生転落死，提訴　遺族，同級生・大学を東京地裁　朝日新聞　８月６日朝刊，37.

Bregman, H. R., Malik, N. M., Page, M. J., Makynen, E., & Lindahl, K.M. (2012). Identity Profiles in Lesbian, Gay, and Bisexual Youth: The Role of Family Influences. Journal of Youth Adolescence, *42* (3) ,417-430.

Cass, V. C.（1979）. Homosexuality Identity Formation: A Theoretical Model. Journal of Homosexuality, *4*（3）, 219-235.

Cass, V. C.（1996）. Sexual orientation identity formation: A western phenomenon. In Cabaj, R. P., & Stein, T. S.（Ed.）. Textbook of homosexuality and mental health（pp.227-251）. Washington, DC: American Psychiatric Press.

枝川京子・辻河昌登（2010）. あるLGBT青年の語りからみるナラティヴ・アプローチの意義 発達心理臨床研究, 16, 117-127.

枝川京子・辻河昌登（2011）. LGBT当事者の自己形成における心理的支援に関する研究――ナラティヴ・アプローチの視点から―― 学校教育学研究, *23*, 53-61.

Erikson, E. H.（1959）. Identity and the Life Cycle. International Universities Press.（エリク・H・エリクソン 小此木啓吾（訳編）（1973）. 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル 誠信書房）

Floyd, F. J., & Stein, S. T.（2002）. Sexual Orientation Identity Formation among Gay, Lesbian and Bisexual Youths: Multiple Patterns of Milestone Experiences. Journal of Research on Adolescence, *12*（2）, 167-191.

針間克己（2014）. セクシュアリティの概念 針間克己・平田俊明（編）セクシュアル・マイノリティへの心理的支援――同性愛, 性同一性障害を理解する――（pp.15-25）岩崎学術出版社

原島有史（2016）. 3 なぜ, 差別や偏見が生まれるのだろう？ 同性婚人権救済弁護団（編）同性婚 だれもが自由に結婚する権利（pp81-89）明石書店

Herek, G. M.（1984）. Beyond "Homophobia": A social psychological perspective on attitudes toward lesbians and gay men. Journal of Homosexuality, *10*, 1-21.

Hershberger, S. L., & D'Augelli, A. R.（1995）. The impact of victimization on the mental health and suicidality of lesbian, gay, and bisexual youths. Developmental Psychology, *31*, 65-74.

日高庸晴・木村博和・市川誠一（2007）. 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業 ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2 厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」成果報告 Retrieved from http://www.j-msm.com/report/report02/report02_all.pdf（2017年8月7日）

平田俊明（2014）. レズビアン, ゲイ, バイセクシュアル支援のための基本知識 針間克己・平田俊明（編）セクシュアル・マイノリティへの心理的支援――同性愛, 性同一性障害を理解する――（pp. 26-38）岩崎学術出版社

堀江有里（2010）. 同性間の〈婚姻〉に関する批判的考察――日本の社会制度の文脈から――. 社会システム研究, *21*, 37-56.

堀田香織（1998）. 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成 学生相談研究, *19*（1）, 13-21.

石丸径一郎（2001）. マイノリティ・グループ・アイデンティティ――人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか―― 東京大学大学院教育学研究科紀要, *41*, 283-290.

石丸径一郎（2008a）. レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルは心理学や精神医学においてどのように扱われてきたか 石丸径一郎（編）下山晴彦（監修）シリーズ・臨床心理学研究の最前線① 同性愛者における他者からの拒絶と受容――ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ――（pp.11-17）ミネルヴァ書房

石丸径一郎（2008b）. レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの日常生活における受容体験・拒絶体験の実際 石丸径一郎（編）下山晴彦（監修） シリーズ・臨床心理学研究の最前線①

同性愛者における他者からの拒絶と受容――ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ――（pp.11-17）ミネルヴァ書房

葛西真記子（2014）．児童期・思春期のセクシュアル・マイノリティを支えるスクールカウンセリング　針間克己・平田俊明（編）セクシュアル・マイノリティへの心理的支援――同性愛，性同一性障害を理解する――（pp.109-122）岩崎学術出版社

Kaung, M. F.（2005）．Mental health and sexual orientation of females in Japan: Using the Internet as a research tool　心理臨床学研究，*23*（2），256－260.

小宮明彦（2001）．同性愛の子どもの実態に関する覚え書き――ゲイ雑誌のテクスト分析を中心に――　学術研究（教育・社会教育・体育学編），*49*，87－104.

眞野豊(2014)．同性愛嫌悪の内面化とクローゼットの不在との間――地方に生きるゲイのライフストーリーの考察から――　地球社会総合科学研究創刊号，71-80.

宮腰辰男（2012）．セクシュアルマイノリティを生きるということ――同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス――　大正大学カウンセリング研究所紀要，35，63-77.

宮腰辰男（2013）．セクシュアルマイノリティを生きるということ――カミングアウトとコミュニティをめぐる危機と回復について――．大正大学カウンセリング研究所紀要，36，39-52.

Mohr, J. J.,　& Fassinger. R. E.（2000）．Measuring dimensions of lesbian and gay male experiences. Measurement and Evaluation in Counseling and Development, *33*, 66-90.

Mohr, J. J., & Kendra, M. S.（2011）．Revision and extension of a multidimensional measure of sexual minority identity: The Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale. Journal of Counseling Psychology, *58*（2）, 234-245.

永田篤史（2016）．LGBT支援，前向き会合　同性パートナー制，要望　当事者ら新潟市と/新潟県　朝日新聞11月３日朝刊，25

二宮周平（2006）．新版戸籍と人権.部落解放　人権研究所

Rosario, M., Schrinshaw, E. W., & Hunter, J.（2008）．Predicting Different Patterns of Sexual Identity Development Over Time Among Lesbian, Gay, and Bisexual Youths: A Cluster Analytic Approach. American Journal of Community Psychology, *42*（3-4）, 266-282.

Rosario, M., Hunter, J., Maguen, S., Gwadz, M., & Smith, R.（2001）．The Coming-Out Process and Its Adaptional and Health-Related Associations among Gay, Lesbian, and Bisexual Youths: Stipulation and Exploration of a Model. American Journal of Psychology, *29*(1), 133-160.

関根和弘（2017）．LGBT，札幌の歓喜　４月からカップル公的認定/北海道　朝日新聞２月１日朝刊，26

Shidlo, A.（1994）．Internalized Homophobia; Conceptual and empirical issues in measurement. In Greene, B., & Herek, G. M.（Eds.）, Lesbian and gay psychology: Theory, research and clinical applications（pp. 176-205）. Thousand Oaks, CA: Sage.

Shilo, G., & Savaya, R.（2011）．Effects of Family and Friend Support on LGB Youths' Mental Health and Sexual Orientation Milestones. Family Relations, *60*, 318-330.

Troiden, S. S.（1989）．The formation of homosexual identities. Journal of Homosexuality, 17, 43-73.

Waldo, C. R.（1999）．Working in a majority context: A structural model of heterosexism as minority stress in the workplace. Journal of Counseling Psychology, *46*, 218-232.

Walters, K. L., & Simoni, J. M.（1993）．Lesbian

and Gay Male Group Identity Attitudes and Self-Esteem: Implications for Counseling. Journal of Counseling Psychology, *40*（1）, 94-99.

横木麻子（2002）．セクシュアル・マイノリティのアイデンティティ形成に関する質的研究　九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻2002年度修士論文.

The obstacles of the psychological research of Lesbian, Gay, and Bisexual identity in Japan -Comparing the studies that were conducted overseas-

Masashi TANAKA
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of the current research was to determine the obstacles and the possible directions of the psychological studies of Lesbian, Gay, and Bisexual(LGB) identity in Japan by comparing the studies that were conducted overseas. As the result, the current research shows that the few studies regarding the development of LGB identity were found, but the studies regarding the measurement of LGB identity was barely found in Japanese studies. The current researcher concluded that the studies that can help creating the measurement of LGB identity are required in Japan. However, such studies are hard to get conducted since the LGB people themselves have different beliefs and feelings toward their own sexualities depending on their social backgrounds, as the studies that are conducted overseas noted. In the history of Japan, there were no legal prohibitions against homosexuals as well as homosexual behaviors. Furthermore, the Japanese government uses the unique identification and registration system, which is known as *Koseki*. Based on these social backgrounds in Japan, the current researcher posits the importance of re-examining the items of measurement, especially the dimensions of "*Identity Superiority*" and "Acceptance Concerns" that were developed by Mohr & Kendra (2011).

Keywords: Sexual Minority, Sexual Identity, Sexual Orientation, process, measurement